Ｊａｎ　２０１５　Ｎｏ．４５

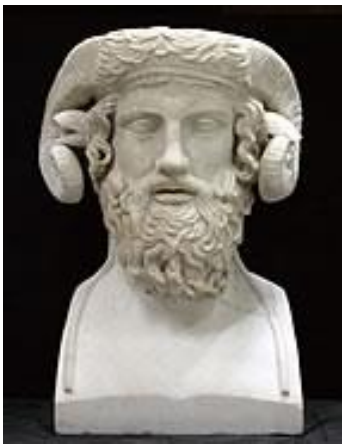
大垣市金生山化石館

化石館だより

コラム

アンモナイトの名前の由来

新年おめでとうございます。今年もよろしくお願いいたします。

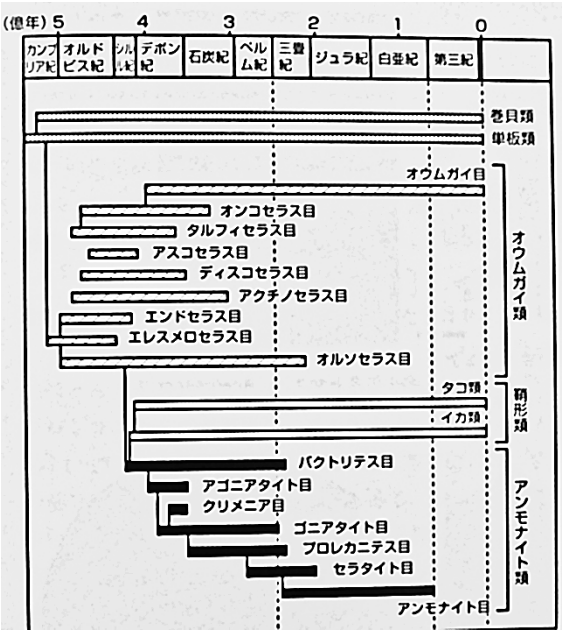


図：アモン神

今年は未年ですね。渦を巻いた角をもつ牡羊の年賀状をいただいた方もあろうかと思います。この羊の角に似た化石と言えば　・・・？
そうアンモナイトです。

ローマ時代の博物学者大プリニウスはこれを「アモンの角」(Ammon's horn)とよびました。古代エジプトでは「ラー」とか「アモン」という太陽神が崇拝されていました。このアモンは牡羊の形をして現れ、神殿にはその姿が彫刻として残されています。

「アンモナイト（Ammonites)」という名前は、「アモン（Ammon）の石（-ites)」という意味で１７８９年、フランス人のプリュギエールという学者によって名付けられました。アンモナイトは、中世には蛇がとぐろを巻いた形で化石化したと考えられ「蛇石（Ophites)」とよばれたりもしています。日本では北海道からアンモナイトの化石がたくさん見つかっていますが、明治時代に横山又次郎博士は「菊石」と名付けています。また他にも「かぼちゃ石」という名もあったようです。菊石というと根尾谷で産出する天然記念物の「菊花石」を連想しますが、「菊花石」は、玄武岩の中に放射状の割れ目ができ、この中に方解石や玉髄等の結晶が成長して花の模様になったもので化石ではありません。



アンモナイトが出現したのは古生代のシルル紀です。アンモナイトの根幹をなすバクトリテス目は、オウムガイの仲間のスフェオルトセラス類から分化したとされています。その後、アゴニアタイト目、クリメニア目、ゴニアタイト目、プロレカニテス目、セラタイト目など、様々なグループが出現しましたが、古生代末から三畳紀に絶滅してしまいました。しかし、セラタイト目から分化したアンモナイ

ト目の仲間は、中生代を通じて大繁栄し、非常に多くの種類に分化していきました。そしてアンモナイトは中生代を代表する示準化石として、世界中の地層の対比に用いられています。一般にアンモナイトと言えば、この中生代に大繁栄したアンモナイト目の生物を指します。アンモナイトは白亜紀末、陸上の覇者である恐竜などと共に絶滅してしまいました。

アンモナイトやオウムガイは、軟体動物の頭足類に分類されています。どちらも巻貝のような殻をもちますが、現生のイカやタコに近い生物です。アンモナイトとオウムガイはよく似た形態をしているので混同されますが、それぞれ別のグループを構成しています。アンモナイトとオウムガイでは殻の内部構造に違いがあり、隔壁の形状や連室細管の位置などが異なります。また殻の巻き始めの部分には決定的な違いが認められています。

金生山からは、*Agathiceras ssp.* *Adrianites? sp.* *Propinacoceras? sp.* *Stacheoceras? sp.* *Perrinites? sp.* など、数種類のアンモナイトが発見されていますが、稀産で標本数も少なく、ほとんどが個人蔵となっているので詳細な研究が進んでいません。

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆　お 知 ら せ　◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

入館者に「方解石」をプレゼントします

１月１２日は初虚空蔵です。山頂の明星輪寺にお参りの際には、化石館にお立ち寄りください。パワーストーンでもある「方解石」をプレゼントします。白、ピンク、黄色、茶褐色などお好きな色をどうぞ。

「金生山再発見」を刊行

開館５０周年を記念して、化石館のあゆみと金生山の化石や鉱物の紹介、また金生山にかかわる最新の話題を紹介した書物を刊行しました。知っているようで知らなかった、金生山の魅力を再発見してください。

金生山化石館・文化事業団事務室にて販売中

問い合わせ：　大垣市金生山化石館　　電話　（0584）71-0950　（ファックスも同じ）
Email　kasekikan@vanilla.ocn.ne.jp